

寒冷地形談話会通信

2003 年度 5 号 [2004 年 2 月 6 日発行]

<http://www.geo.ees.hokudai.ac.jp/kanreichikei/>

- ◆寒冷地形談話会通信第 5 号をお届けいたします。
- ◆本号は、「30 周年記念行事報告」、「卒論・修論大会（2 月例会）のお知らせ」、「寒冷地形談話会総会のお知らせ」が中心となっています。
- ◆卒論・修論発表大会（2 月例会）が 2 月 14 日（土）、東京都立大学理・工教室棟 302 号室で 10:30 から行われます。今回は卒論生と修論生を併せて 12 名の発表があります。詳しくは【卒論・修論大会のお知らせ（2 月例会）】をご参照下さい。（※前号で会場としてお知らせしていた極地研は関係者不在のため確保することができませんでした。）
- ◆寒冷地形談話会総会が日本地理学会春季学術大会会場となる東京経済大学で 3 月 28 日に行われます。詳しくは、【寒冷地形談話会総会のお知らせ（第 1 報）】をご参照下さい。

編 集：小松哲也・縫村崇行・黒田真二郎

事 務 局：黒田真二郎・小松哲也・縫村崇行（都立大）、佐藤 剛（千葉大）、澤田結基・橘美由紀・松岡直子（北海道大）、池田 敦・阿部正洋（筑波大）、天井澤曉裕・近藤玲介・溝邊貴彦（明治大）、福井幸太郎（国立極地研究所）

連 絡 先：〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 東京都立大学大学院理学研究科地理学教室 寒冷地形談話会 代表 黒田真二郎

kanrei-jimukyoku@egroups.co.jp（事務局宛） Tel(代) 0426-77-1111 (内)3835 FAX 0426-77-2589（地理学科事務室）

会費振込：郵便振替 東京 00100-9-171342 寒冷地形談話会

【30 周年記念行事報告】

寒冷地形談話会 30 周年記念行事が昨年 12 月 13 日に明治大学で行われました。来聴者は、年末の忙しい時期にもかかわらず、約 70 名に及びました。

この記念行事では、基調講演、パネルディスカッションそして、ポスターセッションが行われ、このうち基調講演・パネルディスカッションで話された内容については簡単にまとめたものを、本紙に掲載しております。また、寒冷地形談話会 HP 上 (<http://www.geo.ees.hokudai.ac.jp/kanreichikei/>) にて、ビデオ撮影したものの閲覧サービスとポスター発表の要旨のダウンロードサービスを予定しております。これらについては準備が整い次第 ML にてお知らせいたします。（※郵送会員の方には本通信とともに要旨集を送らせていただきます。）

◆基調講演

基調講演は、寒冷地形談話会 30 年の軌跡と未来への展望というテーマに沿って行われました。小嶋尚氏と小泉武栄氏の両氏は寒冷地形談話会発足時の雰囲気や学問的な状況について、白岩孝行氏は地理・地形学から地球物理の分野である雪氷学へ進もうと決意した過程や、現在携わっている研究について講演しました。



◆パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、はじめに 5 名のパネリスト(荻谷愛彦, 高橋伸幸, 長谷川裕彦, 福井幸太郎, 松元高峰, ※敬称略)が自身のテーマや展望を発表, その内容について司会の小野有五さんと来聴者を交えて討論が行われました。以下に, その討論から一部抜粋したものを掲載します。(以下敬

パネルディスカッションの模様

称略)

パネリストの松元高峰さんは地理学から雪氷学の分野に進んだ自身の経験から、フィールド偏重主義をあらためるべきだという考えを述べた。その考えに対して高橋伸幸さんが反論したことから討論が始まった。

松元 (北大) : グローバル&プロセス研究においては地域へのこだわりを捨てる。そしてフィールドに行ってから何が出来るかを考えるのではなく、“理論”“モデル”を組み立ててから、その物理量をとりに行く研究スタイルにした方が良いと思う。

高橋 (北海学園大) : 松元さんの意見は、私の見方と対極のところにある。たしかに、ものを追う時、目的を絞り込み、条件を単純化させれば話はうまくいく。しかし、そこから踏み出さなければ、本質は見えてこない。それには、フィールドを歩き、見ることで、自分の専門以外に、自然の現象がどういう位置づけにあるか知ることが必要になる。

松元 : そうした反論は予想していた。私自身経験から、新しい数式やモデルは本の中から出てくるのではなく、フィールドで得られるものと把握している。しかし、本質であると思ったプロセスがどの位の重みがあるものなのかを確かめるには、一遍、そのプロセスだけを抜き出してクリアにする必要がある。これは物理屋なら当然にやっている。自省として、(地理学出身の)私はフィールドで歩いて考えたりその場でぐちゃぐちゃとやって、結果、研究をしくじったことがある。そうなら、フィールドで歩き考えたことを一度クリアにして、その重要性を確かめる。そして、それが出来た上で、次なる所に歩いて考えるということをしてはどうかと提案する。

しかし、若い頃に名古屋大・北大の雪氷物理屋と仕事をした経験を持つ岩田修二さんは、彼等がフィールドを重視していたことを挙げたうえで、次のように反論をした。

岩田 (都立大) : 最初に“理論”“モデル”ありきではない。それでは、いずれ行き詰まる。そして、すでにあるモデルの後追いに堕してしまい、真のパイオニアにはなれない。ゆえに、まずフィールドありきである。しかし、そのフィールドでの結果を、モデルなどを構築することで、サイエンスにまで高めることも必要である。そのためにも、物理・数学・化学などの素養は不可欠である。これまでの地理の研究者にはそういった努力が欠けていたのだ。

松元 : 先ほどの発言に補足すると、私の同期に学部時代、工学部で量子力学をやりフィールドを全く知らない、例えば北アルプスという場所がどこにあるのかも知らない男がいた。しかし、彼には彼なりの切り口があることをまざまざと見せつけられた。だから、やはりそういった地球物理の人達のやり方を取り入れるのもいいだろうと思った。

石川守さんも、地形屋の多い北大からモデル屋の多くいる地球フロンティアに移った経歴を述べ、自身が彼らのやり方で取り入れたいと思った点について述べた。

石川 (観測フロンティア) : フィールドだけを見ていると、その現象しか見えない。だからそれが本当に全体的に見てリーズナブルなのかを確認するには、やはりモデルという手段が不可欠である。その意味で、フィールドとモデルという両方の視点から研究を進めるのがいいと思う。

司会の小野有五さんは、従来の寒冷地形談話会が地域研究に偏りすぎた点を指摘した上で、次のように述べた。

司会 (小野) : そもそも、今回のパネルディスカッションの題名“寒冷地域の研究の展望”というものからしておかしい。なぜ寒冷地形談話会が地域にこだわる必要があるのか？今なら、グローバルな、例えば気候変化なら氷床コア・海底コアなどを考えなくてはいけなくてはいけな時代なのに。だから、白岩さんの基調講演でもあったように、まずコアを掘ってそこから何かを考えるという研究をもっとやっていいと思う。また、松元さんの発言にあったように、違ったバックグラウンドを持つ研究者のやり方をもっと貪欲に吸収していくパワーが若い人たちに欲しい。

一方、長谷川裕彦さんは、従来の地形学のやり方でもやれることはたくさんあることを強調し、次のような意見を示した。

長谷川 (明治大) : 数学が出来なくても、フィールドを歩き回ってデータを集めて、それで明らかにできる

ことは地球上にはたくさんある。

司会：例えば、氷河が現存しない日本では氷河地形の認定法は、海外の典型的なものと比較してみる identification に帰着する。それをどれだけ徹底するかで、まだ発見はあると思う。また、“前もって一定の基準を持って世界中の地形を見たらどういうことが言えるか？”などの研究は物理屋には出来ない地形屋の特技である。これらの点で私も数学が出来なくても研究出来ることはあると思う。

しかし、従来の地形研究およびその研究者には問題点があると松元、岩田は、次のような指摘をした。

松元：ただ、例えばローカルな谷の氷河地形発達史などはどこに行き着くのか、物理屋にはわからないと思う。だから、そういったものを地形学以外の分野の人にもわかるものとして、例えば、“この研究はグローバルスケールの何かに繋がるものである。”ということのアピールして欲しい。

岩田：やはり、定量的にデータを取り扱う能力とモデルをつくるような能力がない研究者はサイエンティストと呼べない。寒冷地形談話会も、そうした研究者が増えなければ、サイエンスの世界から締め出され、アマチュアの研究グループになる。

司会：ここに来ている方たちの共通点は山が好きなことです。だからアマチュア、すなわち“愛好する人”として、趣味で研究をやってもいいと思う。しかし、それを職業として成立させるならば、我々はその研究というものを、社会的にきちっとした 1 つの制度として認めさせる必要がある。そのためには、雪氷物理の人達がやっているような、よりグローバルなものに対応した研究を行い、“行ってから考える”のではなく“考えて行く”という全く発想を変えた調査・研究のスタイルも取り入れなければいけないと思う。それは白岩さんの発表である“自分がたどって来た道”と重なるのですが、白岩さんはどうですか？

白岩孝行（低温研）：先ほどからモデルの話が出ていて、岩田さんはモデルをやらなくては駄目だとおっしゃる。しかしモデルと理論は分けて考える必要があると思う。私はやはりモデルは、モデル屋さんがつくり、現場に出ている人はモデルではなく理論を出さなきゃいけないと思う。それは、モデルは、全体像でどんないいかげんな式でも言いわけだが、現場を見ている人は、ある現象 1 つ 1 つの関係がわかっている。それゆえ、そこをモデル屋さんが使える原型で出すことが非常に大事なことだと思う。結局、現在モデル研究は非常にさかんであるが、ほとんどは掃いて捨てられるような運命にある。しかし、その中で光るモデルというのは理論がきちっとしている。だから、そのモデルの型過程の部分である理論を出すということが現場の研究者に求められていることだと思う。寒冷地形談話会の場合も、いいデータが多くあるのだから、その点を少し意識すれば非常に脚光を浴びるかもしれない。

司会：この場合、理論とはどういう意味ですか？

白岩：基本的に最終的な形は式で出してもらいたいのが、式でなくとも関数でもいい。もしくは、実際の関係はわからないが、統計的にこういう関係があるとかそういう形でもいいと思う。

前半の討論は、フィールド主体の研究だけで良いのかという松元さんの問題提起に対して、白岩さんが、フィールド研究者の具体的な行動目的を提示することで終わった。

討論後半では「日本のフィールドは露頭などが限られて不便である。」という趣旨のコメントを契機に、“条件の良い海外での研究”について、“学生への教育”について話し合われた。

岩田：松岡憲知さんは「学生には日本のフィールドはさせない。典型的な、条件の良いフィールドで仕事をしないといけないから。若者には、とにかく外国のいいフィールドで仕事をさせるようにすべきだ。」と言っていた。私も賛成する。というのも、先ほど白岩さんがおっしゃったような“理論をつくる”仕事は、条件の良い典型的なフィールドでやらないと成果が上がらないので。

白岩：学生に条件の良い海外のフィールドで仕事をさせるのには賛成です。それともう 1 つ、海外の優れた研究者を日本に招き、学生・若手研究者等が彼らと議論できるような環境をつくるのも大事だと思う。

岩田：寒冷地形談話会は、現在の大学のシステムでは出来ない教育をすべきである。それは、たとえば長い期間、一ヶ所のフィールドで、雪氷学・地質学・地形学など、さまざまな分野の人が基礎的なトレーニングを学生に施すというような教育である。

長谷川：若い学生に海外で仕事をしてもらうことには賛成である。しかし、小泉武栄さんの提唱するような自然学という見方は、日本の複雑な自然にどっぷり漬からなきゃ生まれない。主流は海外での研究でもいいが、やはり複雑な日本の自然を相手にやる人も育て欲しいと思う。

この長谷川さんのコメントに対して、司会は自身の見解を示し、この討論を次のようなコメントで締めくくった。

司会：もちろん日本の地形は大事である。でも、海外は単純で簡単で、日本は複雑で難しい。だからやっぱり、まず広く海外を見て欲しい。30周年で、これをきっかけにいろんな形でローカルにもグローバルにも研究する人達が増えていって欲しい。ぜひ、みなさん、それぞれの視点で、頑張ってください。今日は、五人のパネリストのみなさま、どうもごろうさまでした。（一同拍手）

おわりに：

今回の寒冷地形談話会 30 周年記念行事において、基調講演をしてくださった小疇尚氏、小泉武栄氏、白岩孝行氏、パネリストを引き受けてくださった荻谷愛彦氏、高橋伸幸氏、長谷川裕彦氏、福井幸太郎氏、松元高峰氏、またパネルディスカッションの司会をつとめてくださった小野有五氏、ポスターセッションに参加してくださった研究者の皆様、総合司会を快く引き受けてくださった目代邦康氏、そして長時間にわたる研究発表と討論に参加してくださった来聴者のみなさまに事務局一同、深く感謝いたします。なお、基調講演とパネルディスカッションで話された内容について、紙面の都合上、限られた部分しか掲載出来ませんでしたが、当日の様子を Web 配信する準備をしております。寒冷地形談話会 HP の 30 周年記念行事のページにおいてストリーミング方式で配信します（会員限定）。是非、そちらをご覧ください。当日の雰囲気なども感じてみて下さい。くわしい閲覧方法については、準備が整い次第、ML・通信などにてお知らせします。

【卒論・修論大会(2月例会)のお知らせ】

卒業論文・修士論文発表大会(2月例会)を2月14日(土)に東京都立大学にて行ないます。今回は、卒論生5名・修論生7名の発表があります。

なお、前通信で会場は極地研となっておりましたが、今回は談話会関係者が極地研不在のため、部屋を確保することができませんでした。会場は東京都心よりずいぶんと離れてしまっていますが、発表者も多く内容も充実しております。とくに次年度、卒論や修論に取り組む学生さんには有益なものになると思います。ぜひ周囲のみなさまをお誘いあわせのうえご参加ください。

日時：2月14日(土) 10時30分～17時30分

会場：東京都立大学 理・工教室棟 302 号室 京王相模原線 南大沢駅下車徒歩 15 分

(南大沢へのアクセスは <http://www.metro-u.ac.jp/access.htm>)



(<http://www.metro-u.ac.jp/campusmap/campusmap-j2.htm> から引用・改変)

卒論・修論発表大会プログラム（2月例会）

（※持ち時間は発表・質疑応答含めて30分です。1 鈴 15 分，2 鈴 20 分，3 鈴 30 分）

10:30-11:00 溝邊貴彦（明治大・院）

飯豊山地山稜部における最終氷期とそれ以降の地形形成過程

11:00-11:30 吉村章彦（千葉大・院）

鳥海山南面の亜高山帯における植物珪酸体の運搬・堆積過程の解明

植物珪酸体とは、植物の体内に形成される微小なガラス質細胞であり、ある種の形態が特定の植物に由来することが知られている。本研究は、表題の調査地域において土壤中の植物珪酸体を分類し、その運搬・堆積過程を明らかにすることが目的である。

11:30-12:00 Deo Raj Gurung（都立大・院）

Quaternary history of the Chamkhar Chhu basin, north-central Bhutan, and local tectonics.

Fluvial terraces were investigated in Chamkhar Chhu basin in north-central part of Bhutan in order to decipher tectonics and to understand valley evolution. Deformation pattern of fluvial terraces (widely used in Nepal Himalaya) were key to inferring tectonic history of the basin, while fluvial detritus (gravel and matrix) were used to construct model of valley evolution. The information generated from Chamkhar Chhu was further compared with those of Pokhara basin in Nepal Himalaya to highlight regional contrast in physical processes.

12:00-12:30 伊東敦子（学芸大・学）

玉川上水における法面の非対称とその成因

玉川上水において連続して見られる横断面形が異なる法面（非対称性法面）を、1 年間にわたる観測から、法面におよぼす地形形成作用の実態と成因を明らかにし、さらに非対称性法面の成立過程について考察した。

12:30-13:15

—休憩—

13:15-13:45 片桐一樹（立正大・学）

縞枯山、蓼科山における縞枯れの発生要因

13:45-14:15 矢代武士（日大・学）

尾瀬 至仏山の森林限界を規定する要因

尾瀬ヶ原の西面に位置する至仏山（標高 2228m）は、森林限界の高度が 1600m ほどまで低下している部分がある。植生の分布は基本的に気温条件に影響されるが、このような局地的な森林限界の低下は気温条件だけでは説明できない。本研究では、至仏山の森林限界を決めた要因として斜面堆積物の分布に注目した。至仏山の森林限界は、岩屑斜面の末端や残雪凹地末端と一致する部分が多い。森林限界を挟んだ場所数点で地形・植生断面図を作成し考察を進めた。

14:15-14:45 若松伸彦（横国大・院）

亜高山性針葉樹林帯未発達地域に散在するオオシラビソ林の分布と林分構造

東北日本では山岳毎に、亜高山性針葉樹林帯の分布面積、範囲に差がみられる。それらのうち、針葉樹林の分布はみられるが針葉樹林帯としては未発達な 2 地域において、亜高山性針葉樹の構成樹種であるオオシラビソの散在林の分布特徴、林分構造について検討した。

14:45-15:15 江田慶彦（筑波大・学）

氷食カールの形態に与える地質条件の影響

スイスエンガディン地方サンモリッツ北西山地、日本北アルプス水晶岳付近、日本南アルプス間ノ岳付近の氷食カールを調べ、地質条件がカール形態にどのような影響を与えるかを論じる。

15:15-15:30

—休憩—

15:30-16:00 荻野佳子（筑波大・学）

インボリューションの形態と形成プロセス～北海道東部の実例と実験的研究～

北海道東部において、インボリューションに関する現地調査を行い、形態と土質との間にみられる関係について考察・問題提起する。それを元に実験目的・条件を設定し、擾乱の形成プロセスが見えるような透明アクリル土槽を使用して室内実験を行う。

16:00-16:30 森田 圭（日大・院）

デジタル写真測量による 10m-DEM の作成と乗鞍岳における植生分布の地形的立地条件解析

本研究は、空中写真のデジタル写真測量から 10m-DEM を作成した。また、それを用いて空中写真のオルソ化を行い、その応用として植生分布の地形的立地条件解析を行った。

16:30-17:00 島村 雄一（都立大・院）・泉 岳樹・松山 洋（都立大）※

衛星同期観測に基づく広域積雪分布と山地積雪水資源量のリモートセンシング

-新潟県上越国境周辺を事例に-

新潟県巻機山にて 2002 年と 2003 年の融雪期にスノーサーベイを行ない、山麓から山頂に至る積雪水当量のデータを得た。本発表では、積雪水当量の高度分布が流域の水資源量に及ぼす影響について LANDSAT-7 号の画像解析と合わせて議論します。

（※島村さんは当日都合が悪いため欠席、担当教員の松山さんが発表します。）

17:00-17:30 川上郁夫（都立大・院）

埋没続成の検討による北部フォッサマグナの堆積盆発達史の解明

長野県北部の北部フォッサマグナにおいて、新第三系を対象として泥質岩の埋没続成を検討し、堆積盆の隆起・沈降速度を復元した。さらに、北部フォッサマグナのテクトニクスの変遷から、西側に位置する飛騨山脈の隆起の時期について考察を行なった。

18:00～ 懇親会

【寒冷地形談話会総会のお知らせ(第1報)】

氷河作用研究グループと合同で寒冷地形談話会総会が、日本地理学会春季学術大会会場となる東京経済大学で3月28日に行われます。予定議題は決算・予算報告、04年度事務局担当校、04年度会務予定となっております。みなさま、是非ご参加下さい。

【新会員募集中!!】

当会は随時、新会員を募集しております。新規加入希望者は、1) 氏名（漢字・フリガナ）2) 住所 3) 電話番号 4) FAX 5) メールアドレス 6) 所属、を記入した電子メールを下記の事務局アドレス(kanrei-jimukyoku@egroups.co.jp)までお送り下さい。なお、学部生以下の会員年会費（メール会員）は無料となっています。